

搾り取られ専門サークル: drain

搾精奴隷に

堕ちた魔王。

## プロローグ

勇者が妾の部屋を素通りしてくれたのは、ほんの気まぐれかもしれない。

精一杯魔力を消すお香を炊いたが、魔王様を打ち倒すほどの勇者。

妾の存在に気づいておったであろう。

魔王様を打ち倒さんが為に妾を斬る体力を惜しんだ？

いや、それはあるまい。

なにせ全てが終わった後、妾が様子を見に行くと魔王様は呪いが解けて普通の人間に戻っておったのじゃから・・・。

呪いだけを切り落とすほどの知性と力、そして法力。

妾を斬り殺すことぐらい何でも無かったはずじゃ。

しかし勇者よ。

いくらなんでも性善説に寄り過ぎてはおらんか？

確かに魔王様が魔王に戻るには数千年かかるう。

しかし生きていればこそ、戻れんこともない。

・・・。

まあ、良い。

妾は妾の望むままに生きるのみよ。

まずは、この数百年妾を肉穴として使い続けた魔王様を手籠めにしてやろうぞ。

魔王様の意識の無い今が『ちゃんす』じゃ。

1.  
サキュバスの悪戯。

『リリアンLOVE♥』と大きく書かれたドアは妾のお気に入り。

この仄暗い魔王城で妾の部屋のドアだけがピンク色で輝いておる。

蛍光色のようなケバケバしい色ではなく、柔らかく暖かい処女マ○コのピンクじゃ。

勇者に斬り殺されたであろう魔王様の側近共はドン引きしておったが、馬や鹿のような顔の奴らにはこのセンスが理解できなかったのじゃろう。不憫なものじゃ。

以前はこのドアを開けると妾の食料となる人間の若いオスが抵抗できぬように吊るされておった。

今は居ない。

魔王様が打ち倒されて以来、誰も捕ってきてくれぬ。

しかし、代わりに今は人間の姿に戻ってしまった魔王様がおる。

裸のまま、なんともブザマに横たわっておる。

あの闇よりも深い紫色の肌は人間らしい色合いに戻り、トゲと真珠が埋め込まれたおチ○ポ様はまるでナマコのようななんとも言えぬ肉塊となって、魔王様のふとももの上に転がっておる。

ブザマじゃ。

いっそ殺してやろうかと同情さえる。

妾のような悪女でさえそう思うのだ。きっと本人も意識が戻ったら、自決を望むであろう。

しかしそうはさせじ。

なぜなら妾には食料が必要。

そして次の世代にも・・・。

「それにしても、オスとは業の深いものじゃ。

意識が無くとも射精はしたいらしい・・・♥」

最近は意識の無い男の逝かせ方も慣れたものじゃ。

皮は先に手で剥いてやると良い。

意識は無くとも、皮が剥けるとおチ○ポ様は期待するらしい。

それだけで膨れ上がるわい。

膨れ上がったおチ○ポ様をデコピンすると、嬉しそうにビクン♥ビクン♥と左右に身体を揺すりおる。

人間世界で言うところの「めとろのおむ」と同じじゃな。

一定のリズムを刻みながら左右に触れる様はなんとも愛らしく感じるわい。

しかし亀頭が乾燥せぬ内に妾はそれを口に頬張る。

陰茎に、すこし強めに歯を当ててやると膨らみが増す。

魔王様が妾を肉穴としてお使いくださっていた頃には無かった現象じゃ。

いや、そもそもあの頃の妾は、そんなこと試そうともせんかった。もしもしておったら、妾の首が転がっておったじやろう。

もしかしたら魔王様は元々マゾ気質があるのかもしれない。実際そういう人間のオスは珍しくない。

というよりも精液の量が多く、味の良いオスは十中八九マゾじやった。

尻を叩いてやると、喜んで媚を売る。

そういう情けない男ばかりじやった。

魔王様の場合は、立場上そういう性癖を隠していたのかもしれない。

しかし今は勇者に打ち倒されし敗北者。

立場など無い。

意識も無いから抵抗も出来ぬし・・・の♡

元々無抵抗なオスは、一度搾精したら殺すのが妾の流儀じやったが今は我慢。

魔王様以外に餌が無い。

殺さぬよう十分注意じや。

魔王様の陰茎に歯を当てて、軽く噛むと尚良い。

一気におチ○ポ様に硬さが戻る。

いわゆるフニャチンからの脱却。サキュバス族の頂きに座する妾から見れば餌の準備が終わった・・・という所かのう。

ここまで来たら、手で扱いて良し。

口で蕩かして、良し。

ア○ルで搾り尽くして、良し。

亀頭を「いい子いい子30分の刑♡」に処しても、良し。

やりたい放題じや。

まあ、何をするかはその日の気分次第じやな。

今日は口でしようかの。

膨れ上がったおチ○ポ様を、舌で転がす。

カリの裏側は特に喜びよる。

この部分は元来、膣の肉壁に擦れる部分。

さぞ気持ち良いのであろう。

カリの部分を舌で洗うように舐めながら、亀頭を激しく妾の口の上の柔らかい部分に擦りつける。激しく、激しく亀頭を擦りつける！

コツは亀頭の表皮を剥ぎ取るぐらい強く激しく擦ることじや。

そうすると・・・。

ぶるりゆりゆりゆりゆつと、いとも容易く精液が口の中に溢れ出すのじや。

先程「口で蕩かす」と申ししたがの、蕩けるのは妾ではない。  
射精直後のおチ○ポ様じゃ。

火照ったようにピンク色に染まり、射精したことを恥じるように縮んでゆく。

その姿はまさに『蕩け』じゃ。

妾は粗相をした赤ん坊の汚物を拭う母親のように、微笑みながらおチ○ポ様を暖かな蒸しタオルで拭う。

綺麗に、丹念に拭いてやる。

綺麗にできたらキスじゃ。

亀頭の先に、そっと優しく。

精液を飲んだばかりの妾には魔力が溢れておる。

溢れている魔力をそっと、おチ○ポ様を通じて魔王様に還元するのじゃ。

こうして、妾の食ザーが終わる。

ここで、少し話が逸れるがの。

サキュバスが精液を餌とすることを知らぬ者はいまい。

場合によっては精力そのものを抜くことも有る。

しかし、『搾精したオスに魔力を蓄えさせる』というサキュバスのシキタリを知っておる者は少ない。なにせ古いシキタリじゃからのお。

つまりじゃ。

魔王様は今、妾が搾精してやるからこそ生き長らえておる。

でなくば、意識の無い人間の男がこれだけ長期間に渡って生き長らえるはずもない。

これが現実じゃ。

「・・・今日はもう少し搾れそうじゃな」

妾はほんの気まぐれで、あの勇者があの時妾にそうした時と同じように、本当にほんの気まぐれで、魔王様の上に跨ったのじゃ。

『今日は膣で搾ろう』

その程度の軽い気持ちじゃった。

射精したばかりのおチ○ポ様に今度は爪を立てる。

ひっかいて傷をつけぬよう加減をしながらも、爪の硬さをおチ○ポ様の皮膚にしつかりと伝える。

つつつつつと爪を前後させると、おチ○ポ様が喜びのあまり跳ねよるのじゃ。

こうなると我慢汁がちゅうつと亀頭から溢れよる。

すると自然におチ○ポ様が我慢汁でテカるのじゃ。

まるで漆塗りの器のような美しさ。

妾はそこに唾を垂らす♪

かなり多めに垂らす方がより愉しめる。少し多すぎるくらいがちょうど良い。

潤滑液が有り過ぎて困ることは無いしのお。

ここまで来たら、あとは簡単なものじゃ。

漆のような我慢汁が溢れ出すおチ○ポ様を、妾のマ○コが咥える。

人間のマ○コは所詮ただの穴じゃ。

しかしサキュバスは違う。

人間で言えば『口』に近い。

一度おチ○ポ様を咥えれば、人間の口と同じように『吸う』、『クチュクチュする』、『下の代わりに生えておるマ○コのヒダで舐める、掠め取る』事ができるのじゃ。

サキュバスの頂きに座する妾はさらにそこから、マ○コの中に「返し」が付いておる。これは牙じゃな。

マ○コの内側、一番手前に牙が生えておって、妾の許可無くおチ○ポ様を抜こうとする  
と、牙がおチ○ポ様のカリ裏に刺さる仕組みじゃ。

つまり搾精中のオスが勝手におチ○ポ様を抜くことは叶わぬ、ということじゃ。

無理に抜こうとすれば、ブスリ・・・っ！

無論、妾も立場はわきまえておる。

魔王様が勇者に打ち倒される前までは、常にこの牙をたてぬよう注意を払っておった。

当然じゃ。

魔王様のおチ○ポに牙を突き立てたら、妾の命がない。

しかし、今は・・・クスクス。

意識の無い魔王様が勝手におチ○ポを抜くことはないが、昔の反動でのお・・・。膣で  
精液を搾る時は、必ず牙をフルに突き立てておるのじゃ。

この『すりる』がたまらんでのお♥

何、案ずることはない。この数百年、一度も突き刺したことなど・・・。

・・・ん？

んん？

今なんぞ、ワシの意志とは違う形で動いたかの？

牙が、おチ○ポ様のカリに突き刺さっておるのじゃが・・・。

「・・・っ・・・く・・・。

り・・・リリアン・・・？」

「・・・あ・・・」

魔王様がまぶたを開けてこちらを見ておる。

意識を取り戻したのか？

いや、さもありなん。  
可能性は十分にある。  
しかし・・・。

妾は光速で魔王様の「力」を『さーち』した。  
普通の人間よりも多少強い程度。  
せいぜいが『軍人れべる』じゃ。  
妾が恐れることなど毛ほどもない。  
となると、もう少し魔王様には愉しませて頂かんと・・・の。

「おはようございます。

魔王様。

妾がお分かりになりますか？」

「っん。

リリアンだな。

まだ光がよく捕らえられん。

ここはどこだ？

今、何をしているのだ？」

「はっ。

光が捕らえられないのは、魔王様が人間の身体に戻っておいでだからです。

ここは魔王城の妾の部屋。

今は、妾が魔王様に・・・」

「余に・・・何をしている？」

「搾精をさせて頂いております」

「搾精・・・だと？」

「はっ。

サキュバスのシキタリを・・・」

「ああ！

そういうことか。

古いシキタリだったな。

思い出したぞ。

ならば余は、そちに礼を言わねばなるまいな。

褒美を取らずと約束しよう」

「はっ。有難き幸せ」

「ではどいてくれ、我が肉穴よ」

「・・・」



「どうした？」

余の命令が聞けぬか？」

「それは・・・出来ません」

「なぜ？」

「今、魔王様は妾のほんの気まぐれ故に精液をもう一発搾り取られるのです。故に・・・、どけませぬ」

「・・・??？」

魔王様はたいそう混乱しておるようじゃった。

いや正直に言うと、妾はこの日が来ることを予期しておった。

じゃから、人間を拘束するぐらいなら不足の無い程度の縄で魔王様の四肢を縛り付けておったのじゃ。

もしも魔王様が魔王として復活された際には、つまり妾が逆らえぬほどの「力」とともに目覚めであれば、縄など無いも同じ。縛ったところで妾が罰せられることも無い。

しかし人間程度の「力」しか持たずに目覚めたのであれば・・・。

魔王様は抵抗できぬ。

抵抗できぬまま、妾の餌として永劫存在し続けてもらう。

そのための縄じゃ。

魔王様が縄の存在に気づき無駄な抵抗を試しておいでの間、妾は膣の中の牙を更に突き立てる。

これ以上抜こうとしたら・・・刺す。

そういう脅しの意味を込めて。

さらに妾はマ○コのヒダでカリの裏から尿道までしつぽりと包み込み、『クチュクチュ』する。

泡で音を立てることも重要じゃが、ヒダの重みをしっかり亀頭に伝えることが肝要じゃ。そしてマ○コの中を真空状態にするために『吸う』。

マ○コでおチ○ポ様を『吸う』とお・・・。

尿道の奥で精子の準備をしておった精液タンクが引っ張られるようでの。

男は大抵このようになる。

「くっひゃああああああっ！！！！！！」

「どうされました？」

魔王様

「くっ・・・ぐ・・・ぐぐ・・・あふ・・・あふ・・・あひいいいっ！！！！！！」

「魔王様。」

快感にまみれている所、恐縮ですが・・・ふふ♥

現在魔王様は妾の餌として、一切の自由のない状態に有ります。  
つまり逆らうことは出来ない。

逃れられない。

搾精され続けるしか無い」

「あひっ！ はひっ！ ふぎっ！

さ、・・・サキュバス如きが・・・くふうっ！ な、何を言っている？  
こ、ここ・・・殺すぞ・・・。

あふううっ！！！」

魔王様が魔力を額に込めようとする。

・・・無駄。

人間に第3の目は無い。

魔力自体ほとんど無いし♥♥♥

「クスクス。」

その程度の魔力で何をおっしゃいますやら♥

今、魔王様は古いシキタリのお陰で生き長らえております。

故に！

魔王様は妾から逃れられないのです・・・♥♥♥

あーっはっはっはっはっは」

妾の笑い声に埋もれた、蚊の鳴くような魔王の声を、妾は聞き逃さなかった。

快感に耐えられずに漏らす声が絶望に染まってゆくのを。

「あ、そうそう♥

妾の部屋は人間の瞳では暗闇にしか見れぬでしょうが、万一その縄を解いて更には部屋の外に出ることが出来たとしても、そうはしないことをお勧めいたします。魔王様♥

この部屋の外は・・・魔王様が放し飼いになさったモンスターでいっぱい♪

人間の身体では左右上下もわからぬまま、食いちぎられますよ♥♥♥」

妾の言葉を魔王様がきちんと聞いていたかどうかは定かではないの。

なにしろ乱れに乱れて快楽の強さに耐え切れず、自我が崩壊しかけておる。

普通の人間なら理性がふつとんで快楽から逃げようと、マ○コの牙がおチ○ポ様に突き刺さるのじゃが・・・。(アレはアレで雅じゃぞ。血がおチ○ポ様から滴り落ちるのは、サキュバスとして眼福そのものじゃからのお)

しかしそれでもさすがは魔王様。

牙が刺さらぬよう、腰を引かぬと心がけておいでじゃ。  
良きかな良きかな♥

「ぐひっ！　ぐひいっ！！　ぐひっ！　あひっ！」

「そうそう。もう少しで逝きそうですね？」

魔王様。

意識を取り戻していただいたからには、頑張ってもらわないと。  
御存知の通り、妾の膺は喰心坊でございます。

故に、今回は17回ほど射精していただきます。

ご心配には及びません。

きっちり17回射精するまで、この牙はこのままにしておきます。

故に魔王様は、意識を手放せないの、最後まで頑張って頂くことができます。  
クスクス♥」

「止めてっ！　止めるのだっ！　リアンっ！！！」

今すぐにつ！　あふううっ！！！！

今すぐにつ！！！！

命令をっ！！！！

余は・・・ふぎっ！！！！！！

魔王である・・・ぞ・・・あひっ！」

「クスクス。

そうですね。

確かに貴方様は、魔王様にございます。

しかし魔王様。

敗北者の上、力も威厳もない魔王様は化け物の餌がふさわしいとは思いませんか？

妾は魔王様が愛しゅうございます。

故に、魔王様♥

ケダモノに魔王様を喰わせたくはございません。

ケダモノや腐乱死体に生きたまま喰われるよりは、妾の餌として『ちゃんす』を待つのが宜しいのでは？

魔力を始めた、『力』と魔王ゆえの『威厳』を取り戻しなされた暁には、是非妾の首を刎ねてご覧遊ばせ。クスクス」



妾は舌なめずりをしてみせた。

これは魔王様に「今貴方が溺れている快楽は妾にとってはただの前菜。これからしつかり愉しませていただきますよ。とても楽しみです」という意志を明示したものだ。

魔王様は賢いお方だから、理解されているじやろ。

快楽に溺れて、何も考えられぬかもしれんが・・・の。

それから人間の時間にして、約7時間。

ひたすら射精させ続けたがの。

人間の体ではやはり、連続射精は15回が限度のようじや。

16回目が訪れる前に魔王様は気絶してしまったわい。

膣の中でナマコフニヤチンに戻るのがなんとも、口惜しくての。

悔しさを晴らすために妾は、魔王様の耳元で囁いたのじや。

「実は妾と魔王様の子供が生まれておりますのじや。

なにせ魔王様が打ち倒されて既に数百年過ぎておるからのお。

その間に搾り取った精液が受精しても何ら不思議ではあるまい。

もちろん、全員娘。

4人おる。

彼女たちにも食事を与えてくれぬか？

パッパ♡

## 2. 母と娘の搾精教育。

妾がドアを開けても魔王様は反応していないようじゃった。  
当然じゃろう。

この暗闇、人間の瞳では左右はおろか上も下も分かるまい。  
音でこちらに反応してもおかしくないと思うじゃろう？

それも魔王様は出来なかった。

妾の末娘二人が魔王様の耳元で囁いておったからじゃ。

まだ生まれてたったの83年しか経っておらん末娘の双子が二人がかりで、左右の耳元から勃起を促す言葉を囁き続ける。男としてこれ以上の感涙は無からう？

魔王様が妾の入室に気づかないのも無理はあるまい。

しかし、末娘もまだまだ小娘よ。

言葉だけでは逝かせられず、ただただおチ○ポ様を悶えさせておる。

サキュバスの娘ならばこそ、囁きのみで逝かせることぐらい自由自在にして欲しいところじゃの。

「違うよ。ママ。ボク達はマオー様を射精させないギリギリで勃起させ続けるゲームをしてるんだ」

「そうよ。ママ。アタシ達だって射精させようと思えば何時だって出来るんだから！ やつてみせよっか？」

「うふふ。そう？」

妾の返答を挑発と受け取ったのか末娘達は魔王様の耳元で唇を滑らかに動かし、愛の言葉と恥辱の言葉を左右から別個に吐き続ける。

「ふっひっ！ あはあっ！！！！ 出ちやううっ！！！！ 出ちやうううう！！！！」

「あらあら。

ずいぶん早漏な魔王様なこと♥」

「違うよ、ママ。ボク達が凄いんだよ」

「そうよ。ママ。アタシ達の言葉にマオー様は逆らえないのっ！」

「クスクス。

もう末娘にさえ逆らえないのですか？

魔王様♥♥♥」

魔王様は顎をヒクヒクと動かして震え、尿道の中に溜まった精液を亀頭から吹き出す。

「あらあら♥

たくさん出ましたね。

おチ○ポ様がずいぶん嬉しそうに震えていますよ、魔王様」

「クスクス♥」

「クスクス♥」

末娘のカタワレ、ショートヘアのボクっ娘、名は『ジャクリン』という。名前の意味は『踵を掴んだ者』。

踵は掴まれると男は弱いぞ。

男の股を開くには踵を掴んで開くのが一番自然じゃからのお。

ジャクリンに踵を掴まれると全身に力が入らなくなり、無抵抗なまま股を開かされる。

あらわになるのはおチ○ポ様とア○ル♥

ジャクリンの前ではいかなる男も隠し事が出来ぬ。

どんな時でもどんな場所でもどんな状況でも、彼女の気分次第で必ず秘部を露わにされる。

嫌じやろう？

ボクっ娘末娘にひん剥かれるのは・・・クスクス♥

もう片方のロングヘア、タカピー娘、名は『コーネリア』。名前の意味は『角』。

魔力を貯蓄する魔族特有の器官『角』。

生まれた時にコーネリア以上に妾の魔力を奪って生まれた者はいない。

事実、潜在魔力はピカイチじゃ。

故に『角』と名付けた。

才能溢れる故に、性格も4姉妹で最もタカピー。魔王様が少しでもコーネリアのお気に召さないと、魔力で魔王様に「辛い思い」をさせておるようじゃ。

例えば射精の量が足らぬと、移動魔法で射精したばかりの精液を魔王様の鼻の穴に詰め込んでおる。

嫌じやろう？

タカピー末娘に「辛い思い」をさせられて、責められるのは・・・クスクス♥

「あれ？ お姉ちゃんズの気配・・・」

「あれれ？ お姉ちゃんズ、帰ってきたの???」

「そうじゃ。」

魔界制圧が殆ど終わったからの。

今日はお姉ちゃんたちにもご褒美を・・・」

「ママ、入るぞー。」

おっ！ やってるな!!!

ジャクリン！ コーネリア！ 元気だったか？



50年ぶりだっ!!!」

白い肌にビキニ姿、男言葉の次女。名を『カミラ』。名前の意味は『女傑』。  
4姉妹で最も『力』を持っていた頃の魔王様に体格が近い。

この次女と長女は、魔界の馬鹿どもとの実戦にも投入しておる。

(魔王様が妾と4姉妹の餌になってからは、魔界に「次の魔王」を名乗る馬鹿が多いの  
じゃ。この馬鹿どもの駆逐を長女・次女に任せておる)

カミラは魔王様同様に武道家タイプじゃな。

女ながら絞め技・極め技・打撃を得意としておる。

その全てが魔王級。

故に天界・地上世界・魔界の3世界で、カミラに肉弾戦で勝てる者などおらん。

肉弾戦だけなら、妾よりも上じやろう。

その名の通り『女傑』。つぶりの戦い方じゃが、オスの搾り方もカミラは『女傑』じゃな。

魔王様に限らずオスというオスはボコボコに殴り、戦意を完全に喪失させてから、無抵抗になるよう四肢の関節を外す。

オスが唯の肉塊となつてから、ア〇ルで力強く搾る。

初めてあの搾り方を見た時は妾として感動したものじゃ。

魔王様のおチ〇ポがカミラのア〇ルの中でギチギチと音を立てて搾られてゆく様を見せられた時、妾はカミラにア〇ルの「絞り」では挑まぬと決めたわい。

「全ての男はサンドバッグだ! 叩いて搾って、搾り尽くす♥」

これがカミラの生き方じゃ。

魔王様以外は搾った後、太ももで首を絞めて殺すのも『女傑』故かのお。

ア〇ルに限らず手コキ、マ〇コ、口のいずれも荒々しく、『力』故に『絞り』が良い。

女傑の絞り・・・。

到底、男が耐えきれるものではない。

「魔王様。

ただいま戻りました。

ハリエツトにございます。

おや、どうしました?

かようにおチ〇ポ様をひくつかせて。

私達4姉妹が揃い、牝の香りで満ちているからですか。

搾精して欲しくなりましたか?

クスクス。

いいのですよ?

お母様と私達4姉妹にオネダリなさってはいかがです?

『射精させてくださいませ。搾ってくださいませ。』

おチ○ポタンクを空にしてくださいませ。

最後の最後の一滴まで、しっぽりと・・・』

ちゃんと言えたらしてあげますよ？

クスクス」

最後に紹介するのが長女。『ハリエツト』。名前の意味は『家長』。

妾と魔王様の後を継ぐのはこの女じやろう。

妾のサキュバスとしての性能・技術・経験を全て受け継いでおる。

そして魔王様の魔力・魔術・体術・知識・性能・経験をも全て受け継いでおる。

肌の色も魔王様の全盛期同様に深い紫じや。

魔王様と違い、元々が人間ではないから力が衰えることもない。

悲しいかな後から生まれた次女カミラは、ハリエツトに嫉妬しておる。

カミラは幼少の頃は女言葉じゃったが、姉の異様な才能に気づいてからは一切、女言葉を発しなくなった。

同じように生きていては、一生コンプレックスに苛まれることが分かったからじやろう。やがて末娘の双子も気づくのじやろう。長姉の才能に・・・。

正直に言うとかも、・・・嫉妬しておる。

マ○コの中は妾よりも柔らかく、弾力性が有り、暖かい。熱いくらいじや。

魔王様はハリエツトのマ○コに咥えられると、2秒以上射精を我慢出来たことがない。

15回連続射精を「たいむあたつく」すると、妾かハリエツトが必ず優勝する。

数百年しか生きていないハリエツトに負けることは、数千年生きた妾にとって屈辱じや。しかし、認めねばなるまい。

ハリエツトの純血さを・・・。

最近では魔王様もハリエツトが同じ部屋にいるというだけで射精する。

まさに無敵の搾精魔女・・・といった所かの。

「ぶっ・・・ぶひっ！！！」

あ、・・・・・・あひいいいいいいいつー！！！」

「・・・ハリエツト姉さんが挑発するから、魔王様が射精しちゃったじゃねえか！

あゝあ。無駄撃ちだ。

もったいねえな。

せつかく4姉妹揃ったんだ。

もう少しじっくり責めてから射精させようぜ、なあ？

そう思うだろ？

ママも」

「そうじゃな。」

しかし心配はいらぬぞ。

魔王様は墮落しても『魔王』であり、いくら射精させられてもそなたらの父君に変わりはない。

故に、今日はしっかりと「家族さあびす」してくれるじやろう。

人間としての魔王様の射精限界は15回。

今日はその限界を超えて、倍の30回は逝ってくれるはずじゃ。  
のう？

ぱゝぱゝ♡♡♡

「あ・・・っ!!」

ひっ・・・いゝゝゝっっ!!!!」

「クスクス♡」

「クスクス♡」

「クスクス♡」

「クスクス♡」

魔王様はおち〇ぽ様をビクンと跳ね上げて、勃起を主張しなোস。

これは妾達サキュバスにとって、『搾精して下さい……!』の意味じゃ。

体験版はここまでです。  
残りは本編でお楽しみ下さい。

母 リリアン



長女 ハリエット



次女 カミラ



末娘(双子)  
コーネリア



末娘(双子)  
ジャグリン

